

足利の都市形成と工業化について

板 倉 勝 高

ま え が き

筆者は先に二つの研究で¹⁾、わが国の都市を工業の立場から、量的にⅠ～Ⅹまで10区分し、さらに質的にa, b, c, dの4区分をした。それによると人口集積の割に工業集積の方が大きい所は、左上アーク²⁾であるが、そのグループを新居浜や釜石のように平均給与の高い所と高岡や須城のように平均給与が全国以下の所とに区別することができる。前者がaであり人口吸引力が強く、その工業は都市形成的であり、後者はcで人口吸引力は少なく、したがってその工業自体は都市形成的ではあるまいと考えた。事実cのいくつかの例では自然増以内かプラス若干程度の増加にとどまっていた。そのような都市の工業はいかなる労働力によってささえられているのか、また低賃金という点で共通性のある右下アーク³⁾のdとはどの点が異なるのか。事例によってcにおける都市形成に果たした工業の役割をたしかめ、この2点を考えるのが本稿の目的である。

さきにdの例として佐野市をとりあげたので⁴⁾、それと条件の近い、また位置的にも近くで相互に影響し合いうる所として、cの例としては足利を選ぶのが必然と思われた。また同じような条件の桐生、太田の二つのc都市とも境を接している。いわば北関東のc都市の有力な代表といえよう。

Ⅰ 足利のアウトラインと織物業の発達

1. 位置と地形

戦前は絹・綿混織の足利銘仙で、戦後はトリコットの婦人下着で知られた足利は人口15.6万人⁵⁾の中都市である。栃木県の西南端にあり、群馬県桐生市・太田市・邑楽郡と栃木県佐野市・田沼町ととりかこまれている。現市域⁶⁾は旧足利郡、梁田郡のほぼ全域を含み、渡良瀬川をはさんで北岸に旧足利町と足利郡があり、南岸に旧山辺町・旧梁田郡（明治28年足利郡に合併）がある。足利から北千住、浅草へ直行する東武伊勢崎線の足利市駅が山辺にあるので、中橋・渡良瀬橋を通じて市域の南部と北部とは日常的に密接な関連を持っている。

地形的には北部は足尾山塊の南縁に切り込むいくつかの小河川によってつくられた谷にある。山村部分とその谷の出口につくられた小扇状地、それに渡良瀬川南部の氾濫原の水田地帯に分けられる。足利の市街地はこの谷の中ではもっとも大きい名草川の溪口にある。しかし名草川も佐野における秋山川や大間々における渡良瀬川のように後背地が広くないので、北関東の溪口集落を示す図にはどれも足利は数えられていない。これは足利の商圈の小ささを示している。

2. 足利の成立

足利は中世足利氏の居館という^{ばんな}鑽阿寺や足利学校の所在地として知られるが、江戸時代は土井氏・代官領ののち戸田氏の采邑となった。

足利は上・中・下の3市場の六斎市が開かれ

1) 板倉勝高「工業集積率による都市の階層区分」『流通経済論集』, Vol. 6, No. 2, 1971. 板倉勝高「工業の質による都市の4区分」『流通経済論集』, Vol. 6, No. 3, 1971.

2) Ⅱ・Ⅲ・ⅥとⅠ・Ⅴ・Ⅸの一部、注1)を参照。

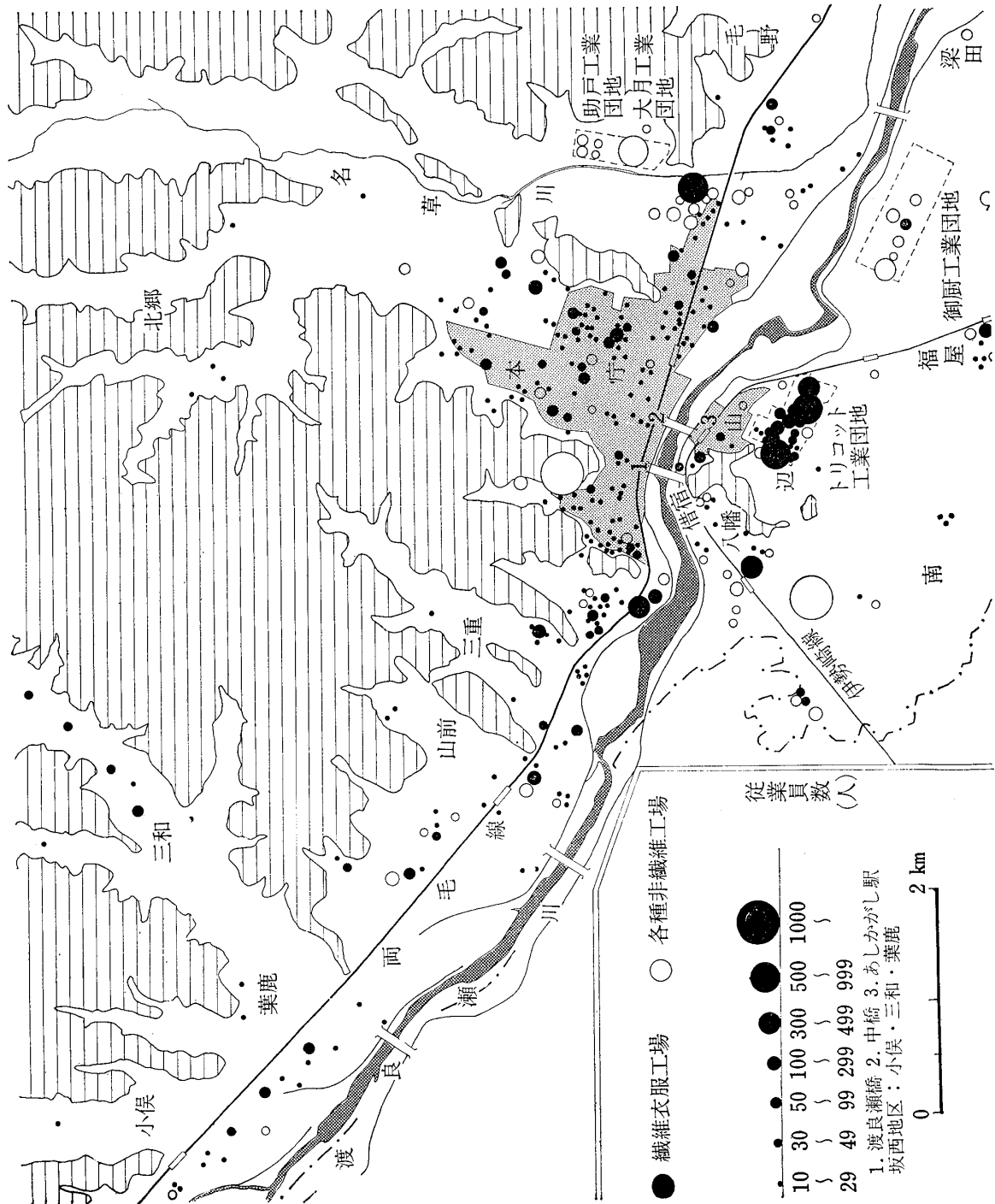
3) Ⅵ・Ⅶ・ⅧとⅠ・Ⅴ・Ⅸの一部、注1)を参照。

4) 板倉勝高「佐野市の工業」『経済地理学年報』, Vol. 17の2, 1971.

5) 昭和40年度国勢調査による。

6) 旧足利郡のうち、菱村は桐生市に、吾妻村は佐野市に合併、現市域の南地区（矢場川）は昭和35年群馬県から合併。

第1図 足 利



たのは1654年（承応3年）だが、織物は桐生でしか扱わなかったのが純然たる地方中心市場であったと思われる。足利の織物の最初のヒット商品といえる足利小倉がつくられたのは安永年間（1772～）だが、織物が盛んになって織物市場が桐生から独立したのは1832年（天保3年）で、維新前わずか36年のことである。この頃は5・10の市で5日は東市場、10日は西市場の2市場であった。

1734年（享保19年）足利は847戸、4,759人、この他に武士階級が約100戸500人くらいあったと考えられる⁷⁾。

明治9年足利郡で45ヵ町村、3万2,610石、梁田郡で29ヵ町村1万3,491石あったが、この中で足利藩領は10ヵ村に分散して4,646石しかなく、他は大名領・旗本領が交錯していた。そして1村1領主だったのは12ヵ町村で、他はみな複数の領主をいただく相給で、足利郡だけで社寺領を除きのべ107人の領主が数えられたという。

足利には戸田氏の陣屋がおかれたが明治8年の人口は1万人に満たない小都市でしかなかった。享保以来140年間には約2倍弱になった。この人口増加率は5年ごとに2.5%程度であまり急速な発展を示したとは考えられない。足利の町としての発展期は明治になってからのことらしい。

この交錯した所領関係は「周辺農村の織物業にとっては領主が規制しにくく、同時に株仲間も形成されることなく、比較的自由的な発展をたどることができた⁸⁾」とされている。もっとも逆に藩による国産奨励などの便宜を得ることは少なかったであろう。足利の織物がひじょうにのびるのは維新直前としか思えないから、所領交錯の功罪は簡単には断言できない。

3. 足利織物の発達

これについては地理学界では斎藤叶吉⁹⁾、辻

7) 入交好脩編『足利織物史』上巻、1969、134頁による。明治8年に土族117戸507人であった。

8) 『足利織物史』上巻、30頁。

9) 斎藤叶吉「足利機業圏の地域形成」『新地理』、Vol. 13の1、1965。

本芳郎¹⁰⁾、川崎敏¹¹⁾など、歴史学界でも入交好脩の『足利織物史』をはじめ工藤恭吉、菊池武幸などの諸研究があつてたいへん便利である。いずれにしても桐生の織物に刺激されて農村織物として起こり、足利新田町の六斎市で取引され、だんだん買継商を頂点とし、機屋を手足とした農村賃機の組織化によつたものであることは間違いない。この地方で機屋、元機屋というのは賃機の幹旋をする商人のことで、織機をもって製織に従事していたものではない。おしいことに実際の工作の場所である賃織農家の分布範囲は断片的な資料以外にはわからない。

『足利織物史』によれば幕末期からのマニファクチュアというのは足利に関する限り史料の誤読のように思われる¹⁴⁾。明治初期まで足利町内にあつたという工場制手工業も、それほど規模の大きいものではなく、代表的なものでも、織工数30人程度であつたらしい¹⁵⁾。明治中期になってようやく「内機20台以上、織工30人以上の作業場を持つ機業の数が増加した」が明治27年足利町で「かかる工場は7,8軒であつた。」¹⁶⁾しかしそれでも桐生に比べるとすでに「作業場の規模において足利の方が勝れていた」という。しかし明治30年代に入ってからはその数はあまり増加せず、かえって増加したのは小規模な機業家であり、また農村副業としての賃機であつた¹⁷⁾。こうしてみるとこの頃の内機20台というのは技術伝習と試織が主ではなかったかと疑われる¹⁸⁾。『職工事情』が載せている足利の職女工の契約書には書面の上だけかもしれないが機

10) 辻本芳郎「関東西北部山麓における機業の生産構造そのI、そのII」『新地理』、Vol. 6の3, 4, 1958。

11) 川崎敏「機業地域の問題——尾張西部と両毛地方」『地理』、Vol. 5の4, 1960。

12) 工藤恭吉「足利の織物」『日本産業史大系』4、関東地方篇、1959。

13) 菊池武幸『足利における織物工業の研究』、足利織物週報社、1956。

14) 前掲書、注7)、224頁。

15) 前掲書、注7)、599頁。

16) 『足利織物史』下巻、63頁。

17) 『足利織物史』下巻、64頁。

18) 現在佐野の縫製業でも同様の観察がなされる。注4)をみよ。

19) 『職工事情』『生活古典叢書』、Vol. 4、大河内一男解説、1971、185頁。

業伝習女生雇証とある¹⁹⁾。また『職工事情』は明治32年に男工119人、そのうち寄宿は8.8割としている。このことについてはのちに考えたい。

斎藤叶吉²⁰⁾が明治28年の統計をひいて足利町内に機6,500台、職工9,750人、織戸325戸あるから、足利町内では規模の大きいマニファクチュアであったとしたのはあやまりで、これは商人である機屋の支配していた周辺農村を含む機数で、職工数が明治32年の倍以上あるので知られよう。つまり明治中期までは足利の織物は純然たる農村工業として発達してきたのである。

Ⅱ 足利市街地の人口増加と工業

1. 明治以来の人口増加

足利町の人口は明治8年に9,422人だったが、22年には1万3,924人になった。5年ごとに14%という今日の東京の衛星都市なみの急成長である。

足利町が東隣の助戸町を合併したのは明治23年で、その時の人口は1万5,162人であった。それ以来足利町は近隣の中心市街地としての地位をたもち、大正10年市政施行後町村合併によって市域は拡大したが、旧足利町は本庁管内とよばれ、合併部分と区別できる。この部分の人口増加の傾向をたどると、足利の都市形成がかなり特徴のある傾向を示していることがわかる。

郡部人口と比較してみるために、両方の資料がそろった年度をほぼ10年ごとに比べたのが第1表である。これによると明治期までの増加率はそれほど大きいものではなかったが、明治年間の増加率はきわめて高かった。とりわけ明治22年から33年までの11年間には55.1%という異常な激増ぶりを示した。この前後も28%という高水準であった。ところが、前大戦をはさむ10年間には、この高水準はやや落ちて、普通の都市なみになったと思われる。しかし不景気の最中であるつぎの10年間にはふたたび23.2%を記録し、全国水準をはるかに上まわった。しかしそれから以後は足利市街地の人口の伸びは急速に衰え、全国の伸び率を下まわることになった。そしてついに昭和25年からの10年間にはわずか0.9%になり、35年から40年の間には絶対減に向かった。もっともこれは中都市のドーナツ現象があるわけで、本庁分は減少しても周辺の山前、三重・毛野・山辺などに移った分がある。40年国勢調査のD I D地域はそれをカバーしているわけだが、それを25年の本庁人口と比べると、全国水準に1%だけ及ばない。つまり足利市街地の人口は昭和初期から全国水準に比べて停滞的になったといわなければならない。

こうしてみると足利市街地の人口増加は、明治期の急増時代、大正・昭和初期の漸増時代、昭和中期・後期の停滞時代に分けられよう。そして

第1表 足利市人口の変化（本庁分、郡部別）

年次	西暦	本庁分人口	郡部人口	合計	約10年ごと伸び率本庁分	郡部	合計	全国伸び率
享保19年	1734	4,759			略 5.0%			
明治 8年	1875	9,422			略 2.8			
明治22年	1899	13,920	53,761	67,685				
明治23年	1890	15,162						
明治33年	1900	23,522	61,497	83,881	55.1	14.4%	23.9%	
明治43年	1910	30,259	67,936	98,195	28.6	10.0	17.1	
大正 9年	1920	35,632	69,624	105,256	17.8	2.4	7.2	
昭和 5年	1930	43,898	73,195	117,093	23.2	5.1	11.1	1.155
昭和15年	1940	48,310	84,729	133,039	10.0	13.7	11.4	1.118
昭和25年	1950	52,810	100,740	153,550	9.3	11.9	15.4	1.165
昭和35年	1960	53,330	92,829	146,209	0.9	— 7.8	— 4.8	1.123
昭和45年	1970	51,152	104,848	156,000	— 4.1	12.9	6.7	1.110
昭和40年DID	(1965)	(61,840)	(88,419)	(150,259)	(対25年17.1)			(118.1)

20) 前掲書、注9)。

てこれらの時代はそれぞれ、農村手織の時代、戦中・戦後の足利織物停迷時代に対応しているのである。

2. 全市域での人口増加

しかしこの人口増加も足利市街地ばかりでなく、足利の勢力圏下にあった村落部分を合わせて考えると、足利町以外の郡部人口が10年間に10%増を記録するのは4回しかなく、しかもその4回目というのが昭和45年で、前記ドーナツ現象の結果なのである。その前の10年間のおちこみは-7.8%とはげしいものがあった。また大正9年、昭和5年頃もおちこんでおり、相当の社会減があったことが知られる。この時代は力織機化の進行した時代で、この間足利市街地の人口は銘仙の全国制覇をバックに相当の高水準で増加しているのに、手織機の収入源を失った農村では人口の流出があったとみられる。

そして足利町と郡部を合わせてみると、第1回国勢調査以前はよくわからないが、おそらく全国水準より高かったのは明治期と帰農時代の昭和15~25年だけである。ことに昭和25~35年の郡部人口絶対減、市街地人口の横ばいによる全体人口の減少は大きいものがあった。これは農家人口の流出によるものであるが、普通は農家人口の流出は35~40年にはげしく行なわれたものであるが、足利では5~10年先に行なわれたらしい。

3. 足利の都市形成

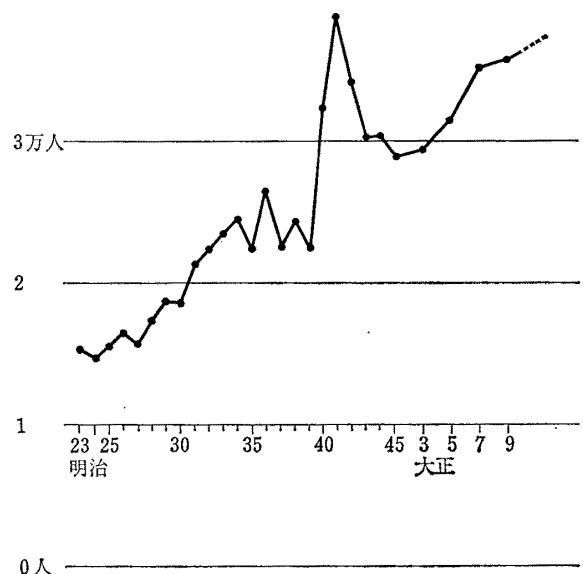
そうしてみると足利の都市形成は主として明治の急増期になされ、この時代にはおそらく他地域からの流入もあって、郡部も入れた全体人口でもかなりの高水準を示した。しかし大正・昭和初期には人口増加は市街地だけで、周辺地域と合わせると、全国水準をちょっと下まわる。これは市街地の人口増も主として周辺地域からの移動にとどまった程度ではないかと考えられる。そしてその後は市街地でもまったく停滞におちいり、全体でははっきり社会減を示すことになった。つまり昭和になってからの40年間に

足利市街地の人口増はみるべきものがないといわなければならない。それではこれらの各期に工業労働力はどのようなありさまであったか。

明治初期の人口急増時代に足利の町にはあまり工場らしいものはなかったことはすでに述べた。むしろそれは買継・機屋を中心とする商業都市であった。工業人口はたしかに越後などから流入していたし、『職工事情』の明治22年の職工数4,102人という数字は8.8割まで寄宿だから、他地域から来た人口であったけれども、足利工業の主軸は農村副業の賃機であった。したがってこの4,102人の職工は大部分は浮動的なもので、景気の退潮とともに急速に市外に去っていく、いわば補完的な労働力であった。

明治期の逐年変化を第2図に示したが、全体としては増加の基調にあるとはいえ、1年ごとの数字では急増、急減をくり返しているのが特徴的である。『職工事情』の明治32年というのも急増期の数字で、おそらく一時的にマニファクチュアのごときものが簇生したのであろう。とくに明治39年から42年までの変化ははげしく、はじめ2年間は75%（1万人）増、つぎの2年間は30%（5,000人）減である。明治期の足利の都市人口は、いちじるしく不安定であったといわなければならない。

第2図 明治期足利人口の逐年変化



4. 職業別人口戸数の変化

大正期から後の市街地の生業別戸数が昭和25年までわかり、昭和25年は生業別戸数と職業別人口の両方がわかり、昭和40年にはD I Dの職業別人口がわかる。それで大正時代からの市街地における有業者の比率の動きをだいたい察知することができよう。

第2表 足利市街地生業戸数・職業別人口数の変化

	年 次	農 業	工 業	その他	計
生 業 戸 数	大正 7年	375	2,165	3,286	5,826
	%	(6.4)	(37.2)	(56.4)	
	昭和 5年	390	3,152	4,748	8,290
	%	(4.7)	(38.0)	(57.3)	
	昭和12年	344	4,111	5,118	9,573
有 業 人 口	%	(3.6)	(42.9)	(53.5)	
	昭和25年	429	3,287	7,066	10,782
	%	(4.0)	(30.5)	(65.6)	
	昭和25年	880	8,264	10,581	19,725
	%	(4.5)	41.9	53.6	
口	昭和40年 (DID)	439	16,466	15,773	32,678
	%	(1.3)	50.4	48.3	
	増 加 数	-441	8,202	5,192	12,953
	増 加 率	0.391	1,992	1,491	1,657

第2表によると大正7年、昭和5年には工業戸数の比率は38%程度であったが、昭和12年には商業など“その他”²¹⁾の戸数比率を食ってて42.9%まで伸びた。昭和5年に対して“その他”は370戸増なのに工業は959戸も増している。ところが戦中戦後の混乱で工業の比率は大きく後退し、実数では昭和5年の線まで後退してしまった。したがって商業など“その他”の比率が大幅に増している。

これを昭和25年の人口になおすと第3次産業が主であった“その他”が53.6%と半分以上を占め工業は41.9%であった。これが昭和40年のD I D人口になると、全体では有業者が1万2,953人も増え、工業人口は約2倍になり8,202人も増加したが、“その他”の増加は1.5倍の5,192人とどまった。

21) 古い数値に合わせるため、農工以外をひとまとめにして、「その他」とした。商業、建設、運輸などが主で、主として第3次産業になる。

これは大正～昭和初期には足利の市街地の戸数は工業よりも第3次産業の方が多かったが、だんだん工業の比率が増していったからである。戦後それは旧に復したが、戦後の15年間にふたたび工業人口の比率が伸びて半ば以上を占め、第3次人口をおさえた。つまり戦前は銘仙、戦後はトリコットなど足利織物の全国的地位が高い時期には工業の比率が低く、それが全国的比率を低下させてくると市街地の工業人口比率が増加するという、常識とは逆の関係を示している。

これは足利の市街地の形成要因が本質的には商業などを中心とした第3次人口なので、周辺村落地域で行なわれる工業生産（昔は賃機、今は工場）が不振になるとそのセンターの部分である市街地の人口比率は強い影響をうけ、第3次人口はやむをえず工業の方へ移動して工業人口の比率を増加させるのである。だからこの工業労働力は都市下層の労働力である。そして工業人口が有業人口の半分以上を占めるからといって足利市街地を工業都市であると考えてはならないであろう。そのことを明らかにするためには都市足利の産業からみた性格と都市の勢力圏を考えなければならない。

5. 工業人口の構成

現在の足利市の工業人口をみるとD I Dから1万6,466人、41.8%、周辺部分から2万2,894人、58.2%である。都市労働力4、村落労働力6によって成立しているといえる。市外との工業労働力の収支は差引406人の純入超であるから大きな影響があるとは考えられない。

6. 工業による転入人口

工業がどの程度人口をひきつけたかということは、主要工場調査²²⁾が当工場に勤務したために足利市内に転入した者の数をあげている。99人以下の規模の工場で13.4%、100人規模以上で23.7%である。これを44年の数値で計算する

22) 地域開発研究所『足利市基本構想に関する調査研究報告書』、1970、105頁。

と99人以下規模3,210人、100人以上規模2,369人で合計5,579人、総従業者数に対して16.4%にあたる。全有業人口（40年）に対しては6.8%にすぎない。佐野の場合よりはやや多いが、それでも全工場創立以来でこの数だから、足利の工業人口が他地域からの転入人口によってまかなわれたとは考えられず、主として勢力圏内の人口にたよったものであるといつてよいであろう。

これを傍証する資料は同じ報告書の市民生活調査で世帯主に対して居住歴をきいているが、“変わらない”と市内移動で88.0%を占め、全世帯でも他地域からの転入は12%にすぎない。もちろんこの中には環流やいわゆるUターンも入るわけである。

Ⅲ 足利市の産業

1. 産業別人口

昭和40年に足利市の有業人口は全域で7万8,518人あったが、農業は1万1,360人で14.5%と比較的に軽く、工業が50.1%と約半分ある。第3次人口と建設業で残り31.7%となるが、この中では卸小売業の1万2,631人、サービス業の7,116人などが多い。運輸通信・金融保険・公務員などは1,000～2,000人台で割合少ない。したがって人口比率だけから見ると足利はなによりも工業都市だという見解が出てくるのはいちおう当然なことなのである。

2. 農 業

農家の総数は7,272戸、耕地面積4,460haあるので、1戸当り0.613ha、栃木県全体の平均1.1269haの約半分と低く、隣接の佐野市の0.848haよりも低い。第2種兼業農家率は55.0%で県の34.0%よりは高いが、佐野市の50.0%とは同じくらいである。佐野市の勢力圏全部合わせるとかえって57.0%と足利より高くなっている。農家経営の特徴は現金販売高の少ないことで、販売なしが23.1%、10万円以下が35.2%で、累計で58.3%もある。さらに30万円以下を合わせると83.5%で足利農業の過半を占める。生産物の面

からは、販売収入の第1位が稲作の農家で61.0%、それに販売収入なしを加えると82.1%と大部分である。昔は桑園も多かったであろうが、今は少なく、タバコなどの工業作物もみるべきものはない。野菜・果物を第1とするものが心持ち高い。農家の経営としては特別な特色をみとめられず、ただ極端な零細性をあげなければならない。しかし大筋としては、これらの零細性は織物工業の原因になったのではなく、織物や工場ができたから零細になったとみるべきである。同じく零細だといつても、山手の三重・山前・北郷・葉鹿・三和は0.3～0.4ha台なのに、旧梁田郡である南部の御厨、梁田、久野、筑波などは0.7～0.8haあり、一率にはいえない。昔の賃機圏はよくはわからないが、御厨や梁田も含まれていたことはたしかでその点で、区別はなかったはずである。しかし工業や市街地の通勤の面からは山手の方が便利であったと思う。したがって兼業農家率も山手の方がだいたい7割以上を示し、南部の水田地帯は3～4割にとどまっている。

これらの農家の専業・第1種兼業からの脱落率²³⁾は昭和35～40年に1,642戸、40.6%と計算される。脱農家数こそは191戸（2.5%）と少ないが、二兼化を合わせ考えると実質的に農業経営が崩壊していることがわかる。

しかし農業の崩壊によって得られる新規労働力は、脱落農家1戸当り2人としてもわずか3,284人にすぎず、第1次人口を除いた就業人口の5%にすぎない。また35～40年の流出率がつづいたとしても、つぎの5年間の脱落戸数は1,156戸と前期より486戸も少なくなる²⁴⁾。つまり足利市の産業は新規労働力源としてもはや農家人口に多くを期待することはできない。

3. 織物以外の工業

トリコット工業 織物業以外の足利の工業についてはトリコット団地について沢田清の報

23) 脱農家と2種兼業化した農家を加えたもの。

24) 実際には35～40年の脱農家率はもっと減少し、26.8%、879戸にとどまった。

告²⁵⁾があり、最近の動向については日下部高明の研究が要を得ている²⁶⁾。簡単にいえば足利の工業は元来賃機を主とした小幅織物が中心であったが、戦後ただちにトリコット（たて編メリヤス）に転換した。これを主導した殿岡利助らが商人資本出身であったことは注目すべきであろう。

トリコットの編立は戦前から福井が産地であった。精練がむずかしいものなのでよほど実力のある織物産地でないと進出することはできない。福井ではトリコット生地生産が主であるが、足利では縫製加工まで行なうことが特色である。とくにナイロン原糸の改良によって、婦人下着の量産を行なった。生活の洋風化にともない、銘仙などの小幅織物は低落をまぬがれなかったが、婦人下着の足利として全国を席卷したのである。そして発展・拡張の結果、全国にさきがけて中小工業団地を組織した。有名なトリコット団地がこれである。団地ばかりでなく編立・縫製の下請化は広範に行なわれ、佐野の場合と同様に零細工場はたえず再生産されている。昭和43年²⁷⁾にトリコットの事業所は490、従業員3,939人、トリコットの変型とみられるレースが事業所数11万2,599人あり、分類上衣服に分類されている縫製だけする433事業所²⁸⁾、2,488人を加えると1,035事業所8,592人を算する。なおこのほかちょっと違うが織物よりはトリコットに近い丸編メリヤスが794人、横編メリヤスが772人ある。これに対して織物は1,349事業所、4,752人で、だいたいトリコットの半分になってしまった。

撚糸業 織物からの関連で発展したのはトリコットだけではない。まず古くから葉鹿・北郷などの傾斜地で水車をかけてはじめられた撚糸工業は、合成繊維になってからもますます生産額をまして他産地の需要もみたしており、

139事業所、従業員2,098人を持つ。

ゴム・プラスチック業 しかし織物関連で最大のものはゴム・プラスチック工業である。これは前記殿岡利助らの買継商などが、戦時中にゴム加工に転換し、興国化学工業となり、戦後ゴム靴とトリコットそしてプラスチック・シート加工に発展したものである。織物地域からゴム工業という例は、大きいものでは久留米があり、小さい例は佐野にあった。いま、ゴムとプラスチック・シートの2工場約3,000人あり、足利最大の工場になっている。

機械・金属工業の不振 足利工業の業種的な特色は組立機械工業の弱いことで、一般機械・電機・輸送機・精機合わせて2,773人しかない。そのうち約半分が一般機械である。織物地帯だから織機の有力メーカーができそうなものだが、これらはその萌芽たるにとどまっている。足利産地が小幅のジャガード遣いであったため、他の広幅・平生地産地のような量産化・機械化に一步おくれたためであろう、戦時中の疎開工業も3、4の例を除いて定着したものはない。また新しい助戸工業団地に三洋電機（東京三洋）を誘致しても、つくられるものは技術的には程度の低い石油ストーブにすぎず、これはむしろプレス工業と組立作業であろう、とてもこれで高度の機械技術集団をつくり、高給与地域になることはできない。

金属プレス工業 ふつう金属プレス工業というと機械工業の下部組織であるが、足利のプレス工業は発生的には戦時中の軍需工業で、太田の組立工業の下請であったが、現在では鍋、やかん、その他台所用品が多い。生産30億円という。その点高岡のアルミ工業に似ている。

階層構成 トリコットの場合でも、ゴム・合成シートの場合でも中心となる編立や成型部門の他に膨大な下請加工部門を組織した方が有利である。したがってこれらの中心となる工場は、産業資本であると同時に実質上は製造問屋である。そのことは小規模な加工部門が絶え間なく再生産されていることと結びつく。

足利の工業の階層構成を第3表でみよう。全

25) 沢田清「足利のトリコット工業団地について」『東京教育大学地理学研究報告』, Vol. 8, 1964.

26) 日下部高明「桐生・伊勢崎・足利の織物工業」『足利高等学校研究要録』, Vol. 4, 1969.

27) 本章の工業に関してはことわりなきが43年の数字.

28) メリヤスは編立・縫製（両方）をする場合には“繊維工業”に、縫製だけするときは“衣服工業”に分類される。

第3表 足利市工業の階層構成

規 模	工 場 数	従業者数	同構成比
29人以下	4,140	18,440	55.1%
30～99人	91	5,064	15.1
100～999人	25	7,043	21.0
1,000人以上	2	2,937	8.8
計	4,258	33,480	100.0

工場のじつに 97.2%にあたる 4,140が29人以下規模で、1,000人以上は興国化学の2工場しかない。従業者数をとっても半数以上が29人以下規模で、99人以下を加えると70.2%と大半を占める。300人規模以上がまったくなかった佐野に比べれば、たしかに工業のスケールが違うという感じがするが、全工業従業者に比べると大工場の比率は小さく、零細工場が主である。

給与水準 全体で 38.1 万円で全国平均の 54.2万円よりはあるかに低い。殊に精密機械・家具・皮革・縫製は10～20万円である。これらは業種というよりは規模の問題であろう。繊維は全体で33.8万円だが、内訳は伝統の織物は20.7万円、レースが29.3万円、メリヤスは35.6万円で、熟練男子の労働力を必要とする染色整理は50.9万円と割合高い。化学（70.5万円）と鉄鋼（62.7万円）は群を抜いて高いが、人数は少ない、中分類で50万円以上なのは一般機械と輸送機で、やはりこれらが工業地域の柱になるべきものであることを示す階層別の給与水準がわからないのが残念だが、わかればやはり相当の格差を示すことになる。

工業労働者の男女別 足利は繊維の町だから当然女子工員の方が多いかと思うと、男54.2%で男子の方が2,820人も多い。もちろん繊維・衣服・ゴムなどでは女子の方が多いが、織物ですら1:1.7くらいで男子の従業者がいる。手織の昔では考えられないことである。力織機化や一家専従化などで織物・縫製に男子が従事するようになったのであろう。繊維・衣服・ゴム以外の分野では男子の比率が高くなっている。

4. 足利工業の特色

このような足利工業は三つの点で特色がある。

一つは資本がいわゆる地場の資本であり、金融的には地元が育成した足利銀行によっている。二つには織物にもせよ、メリヤス・ゴム・プレスまで主として日用消費財の最終製品で、かつ製品が多種・多様であり、また足利での隆替がひじょうにはげしい。足利で織られる織物の種類は現在でも20種や30種はあるだろう。これはちりめんだけの丹後産地²⁹⁾やアンダーウェアで広幅・後染専門の北陸産地とはちがう。足利小倉や足利銘仙が全盛だったのは10年くらいのわずかの期間で、つぎの羽二重やトリコットにかわられていく。しいていえば昭和40年以後このようなヒット商品が出ていないといえる。

三つ目はこれらの生産は主としてたくさんの零細工場を組織化した問屋制家内工業的な側面も持つ工場（メーカー）によって推進されている。トリコットやレースなら資本の必要な編立（とデザイン）は自工場でし、縫製は下請に出す。そしてこのようなプロモーターであるメーカーの有力なものは元来買継商や機屋の商人資本である場合が多い。

5. 工業の地域的展開

これらの工場の配置を第4表でみよう。工場数がもっとも多いのは桐生に近い阪西地区（第1図をみよ）であり、1,332工場、30.1%を占める。しかしその規模は一般に零細で、足利の工業に占める相対的な重要性は事業所数、従業者数、出荷額の順に少なくなり、出荷額ではわずかに6%を占めるにすぎない。西部・北部・東部の3地区も同様の傾向を示している。

これに対して本庁管内は事業所数では阪西について1,132（26.6%）で第2位であるが、従業者数、出荷額の順に重要度が増し、出荷額では44.9%を占める。南部地区も同様の傾向をもつ。つまり工場らしい工場は中央部に集まっているわけで、100人以上の分布図（第1図）を書いてみると市街地を中心としたドーナツ状に配列している。

29) 丹後には後染（ちりめん）と先染（西陣の出機）とある。先染は海岸地方に多い。

第4表 足利市工業の地域配置（昭和43年）

（出荷額等は単位万円）

		総 数 (構成比)	坂 西	西 部	北 部	本庁管内	南 部	東 部	御 厨
全 工 業 (数)	事業所数	4,258	1,322	581	287	1,132	420	271	245
	従業者数	33,480	4,185	3,866	1,065	12,821	7,970	1,511	2,112
	出荷額等	9,377,668	559,209	767,774	62,811	90211,406	3,019,709	264,844	491,915
全 工 業 (比)	事業所数	100.0	31.0	13.6	6.7	26.6	9.9	6.4	5.8
	従業者数	100.0	12.5	11.5	3.0	38.3	23.8	4.5	6.3
	出荷額等	100.0	6.0	8.2	0.7	44.9	32.2	2.8	5.2
織 維 (比)	事業所数	61.9	43.3	15.1	8.4	17.6	6.2	5.3	4.1
	従業者数	51.1	18.6	13.4	3.7	31.5	25.1	4.5	3.2
	出荷額等	45.4	9.7	10.5	0.5	44.8	39.3	3.3	1.9
衣 服 (比)	事業所数	10.2	16.9	11.8	4.4	43.6	10.9	5.5	6.9
	従業者数	7.4	14.6	18.2	2.9	44.8	9.0	3.7	6.9
	出荷額等	5.9	8.6	15.2	1.3	62.4	6.7	3.6	2.2
金属組立 (比)	事業所数	11.3	14.0	12.1	3.3	35.1	24.0	4.6	9.2
	従業者数	16.1	6.8	8.5	2.3	45.8	19.0	2.4	15.2
	出荷額等	13.7	4.5	6.1	1.2	54.0	13.6	1.2	19.7

第5表 足利における織物・織物関連工場の増加

	本 庁 管 内			郡 部			総 計
	織物工場	関連工場	合 計	織物工場	関連工場	合 計	
大 正 4 年	21	17	38	17	3	20	58
大 正 13 年	33	15	48	22	4	26	114
昭 和 2 年	38	22	60	26	5	31	91
昭 和 9 年	51	44	95	88	7	95	190

繊維工場は坂西地区が圧倒的に多いが、生産額では本庁管内と南部がはるかに多い。新しい工業である衣服と金属組立は本庁管内が多い。金属・組立は新しい団地ができていたので、南部や御厨にも相当の集積がみとめられる。ゴムは本庁管内が圧倒的である。

このような工業の中央部への集積は、じつははじめからあったことではなく、殊にドーナツ状の展開は比較的新しく、とくに工場団地がつくられるようになってからはげしくなった。

そもそも明治の初期には従業者10人程度以上の、工場と呼べるものはいくつもなかったし、100人以上の工場はまったくなかった。明治19年の栃木県統計書は、県内に工場数41のうち足利郡内に織物工場6としており、24年になって

織物工場8、仕直工場（整理）1とある。これが全部本庁管内にあったわけではない。いずれにしても全部で九つでは分散にしても集中にしても問題になるような数ではない。明治43年になると郡内工場数も73と増加する。そのうち織物工場は56工場で、その4.1割が本庁管内にある。関連工場は16工場で、7.5割の12工場が本庁管内にある。

明治43年の工場名簿によると50人規模以上のものは足利町は木村工場（84人）、山保織物工場（55人）の2工場で、周辺は三重の穴原多四郎工場81人、両野整理工場73人、山辺に足利模範製糸会社65人である。大きいものは本庁管内にばかり集まっていたというわけではない。しかし織物関連工場に関しては明瞭に足利集中の傾

第6表 昭和26年足利地方力織機工場の分布表

	全工場数	1～5台	6～10台	11～12台	21～30台	31～40台	41～50台	51～61台	61台以上
足利(本庁分)	319	94	152	45	16	3	2	1	6
三重	73	31	25	11	3	1	2	2	
山辺	53	22	25	4		1			
北郷	152	66	61	5			1		
山前	107	42	46	16	1	2			
名草	32	15	12	5					
葉鹿	161	99	53	9					
三和	340	174	116	39	9	1	1		
小俣	96	51	26	13	3	2	2		
菱 ⁽¹⁾	67	31	25	10	1				
御厨	28	11	11	5	1				
筑波	28	21	7						
梁田	17	13	4						
久野	6	4	2						
富田	6	4	2						
吾妻 ⁽²⁾	11	11							
合計	1,467	689	567	162	34	10	5	3	6

注 (1) 菱は桐生と合併。

(2) 吾妻は佐野と合併。

向をみせていたといえよう。大きいといってもこのくらいのもので、唄にも歌われた³⁰⁾足利町の“七カ所名のある機工場”というものの規模は前記木村・山口(山口保三郎)の他は秋間25人、辻35人、阿久津25人、長谷川は不明である。だからマニファクチュアの規模を過大に考えたり、マニファクチュアの様式が一般的であったと考えてはならない。

したがってこれらの工場は当然一方では製造問屋として織元(機屋)の業務を営んだわけで、明治32年の「足利織物同業組合」の名簿をみると、いずれも織元を意味する織物製造業として名を連ねている。長谷川(孝一)が作七の跡であるならば、これは組合発起人の筆頭であった。つまりこれらは内機をもった元機屋である。

当時汽力はまだ十分使用されておらず、使われても準備・整理部門だけであったという。足利が力織機化するのは大正中期から昭和初期にかけてで、この明治43年頃はいわゆるマニファクチュアの絶頂期であるが、工場化していたのはこのくらいで、大部分は農村賃機であった。もちろん一時的には織物工女として新潟県や群

馬県から転入している記録はあるが、前記のように年毎の変動がはげしいので他地域からの工業労働者の転入は、継続的かつ相当量のものと考えてはならない。

しかし大正以降、賃機と並行して力織機化は進行し、それにともなって工場も増加した。織元の上層部が経営したものが多かったらしい。大正4年から昭和9年までの19年間に織物と織物関係の10人規模³¹⁾以上の工場数は58から190へと約3倍にふえている(第5表)。そのでき方をみると、工場はまず足利市内にでき、だんだん周辺農村部に及んでいったことがわかる。しかし昭和9年についてみると、本庁管内と周辺郡部との比率は半々で、織物工場だけについてみると139工場中51工場が本庁管内だが、半数以上の78工場は郡部にあった。そしてなお相当数の零細力織機工場と手織の賃織が郡部にあったと思われる。足利市内ははっきり染色・整理などの織物関連工場が多く、これらは86.2%までが市内に集まっている。したがって昭和初期の

30) ひとつとせ節に、十七トセ七カ所名のある機工場木村に秋間に辻・阿久津、長谷川・岩木・山口さんとある。

31) 栃木県統計書は大正初年から10年までの織物業にかかわる事項を、1.工場、2.家内工場、3.織元、4.賃織業に区分している。大正10年以後規模別となる。注16) 484-90頁による。

足利市内の工場は織物そのものよりも織物関連の工程で、織物自体は力織機化した時代でも周辺農村に広くひろがっていた。

これを示すのは昭和26年の統計³²⁾である。第6表で力織機をもつ全工場で1,476工場のうち79.4%が郡部にあり、従業者も67.5%が郡部にあった。この統計は織機台数による区分も出ており、市町村別の階層構成がなしうる。従業者数でみると10台以下（ほぼ5人以下）という零細層が郡部で55.6%、本庁管内で36.6%、50台以上（平均94.5人）という上層工場は8工場のうち7工場までが本庁管内であり、織物工場でも規模の大きいものは本庁管内とその近接部分に大型工場がふえ、三和・北郷・葉鹿・小俣などの零細工場地域は相対的に低落した。そして近時トリコットの御厨・助戸などの工場団地がD I D外周部につくられ、第1図のようなドーナツ状の現況に到達したわけである。

6. 商業・買物圏と銀行

商業 足利の商業は従業者1万1,034人、小売店舗2,479店、卸売店舗612店、その売上高は卸471億円、小売157億円³³⁾で卸・小売の比率は2.29と高い。卸の中では繊維の扱い高が247億円で52.4%を占め、全国平均11.8%よりひじょうに高い。ついで衣服・農林水産物・化学は全国平均よりやや高く、繊維が単独で半分以上を占めているが、この超過分を除いても、この3業種の比率は約2倍になり、全国平均に比べても相当高い地位になる。衣服は製造卸が多いのだから高いのが当然であるが、繊維関係の商社が扱っているものが多い。化学はゴム・プラスチックがあるので当然である。

不思議なのは農林水産物の取引が多いことである。これはおそらく足利市にある二つの市場で取引される水産物のためであると考えられる。足利の魚卸商の勢力は前橋から宇都宮にまで及ぶといわれ、かなり広範なサービス圏を持って

いるといわれる。魚卸商だけがなぜこのような勢力を持つにいたったかは、考えなければならない。

これに対して鉱物・金属・機械などの生産財の比率はいちじるしく低く、食料品も高くはない。

小売の大きさは市民1人当たり10.5万円ほどで、全国平均10.8万円に比べてそれほど低くはない。百貨店1、大型スーパー2を数えるが、小売の業種としては特別な特徴はみられない。

買物圏 市内での買物は最寄品は各地区に分散しているが、買廻品については77.7%が中央商店街に集中している³⁴⁾。もっとも22.3%のその他の地区の商店街も事実上中央商店街の延長である国道50号線上にある。しかし町並はかなり立派にみえる葉鹿・小俣・田中・福居も買廻品については低く、近隣商品の小センターたるにとどまっている。買廻品店の側からいえば、極端な一点集中型といってよい。

金融 足利には銀行が多い。これは工業活動というよりも、商業活動のためにつくられたもので、地元足利銀行は織物商社の資本でつくられたものだった。この銀行は地方銀行としては珍しく何回もの恐慌をのりこえて、戦時中の地方銀行の整理の時も栃木県を代表する銀行として生き残ったが、これはこの銀行のおもな業務が地元買継商がうけとった東京有力商社の手形の割引だったため、不況に弱い工業投資のためには融資をしなかったためだとされている³⁵⁾。つまりまったくの商業銀行であった。足利銀行のほか、第一・富士・協和など市中銀行3行と商工中金も支店をかまえている。もっとも最近では県下における商業とその結果である金融需要は相対的に低落しているらしく、足利銀行の本店が宇都宮に移転したのは、それを象徴する出来事であった。

IV 足利の勢力圏と都市としての地位

足利市の勢力圏をみるために、買物圏と通勤圏をしらべ、それにもとづいて足利のD I Dの

32) 栃木県経済部商工課『栃木県の繊維工業』、1952、34-37頁。

33) 昭和41年度「商業統計表」による。

34) 注22)による。

35) 栃木支局編『栃木県の百年』、毎日新聞社、1969。

都市としての地位を考えてみたい。

1. 商 圏

足利市のもつ小売圏は意外に小さく、「足利市基本構想」によれば市内買物率92.0%となっている。これは佐野の場合の96.4%よりやや低い。これは買廻品の調査で、佐野へ2.3%、桐生へ3.2%、館林へ1.6%である。意外なことに佐野市の足利への買物依存率は0.8%で、足利の方が弱いということになる。田沼から足利へは8.4%あるが、これは田沼西部の旧飛駒地区が25%も足利に依存しているためである。

これらの市外買物者の居住歴をみると、それらの各都市の出身者ではなくて足利地付きの人が多いう。これは佐野へは宮田地区、足利へは小俣地区、館林には南部地区が依存しているわけだが、この範囲は齊藤叶吉³⁶⁾が想定した足利の機業圏の範囲と一致する。その図には飛駒は入っていないが、飛駒³⁷⁾は足利・桐生両方の賃機圏の交錯している場所だったらしいが、村の買物圏は足利に向いていると思われる。つまり足利の買物圏は、飛駒以外は現足利市域よりは狭い範囲しかもっていないことがわかる。

2. 通勤圏

国勢調査³⁸⁾の結果から足利市の通勤圏をみると、足利に入るのは県内から1,530人、県外から4,366人、合計5,896人である。これに対して県内へ1,019人、県外へ4,230人、合計5,239人であるから、差引き647人だけ流入分が多い。しかしこれは全就業者数から1次産業従業者数を除いた数の0.5%にもみえない数で、足利の産業がとくに外部地域の労働力に依存しているとはみとめられない。

流出・流入が多いのは、佐野・桐生・館林・太田・東京などである(第7表)。東京・桐生に対しては出る方が多く、太田と佐野に対しては

第7表 足利へ出入する就業者の多い市町村(昭40)

	足利から出	足利へ入	差 引
佐 野	580人	863人	+ 283
桐 生	953人	535人	- 418
館 林	446人	475人	+ 29
太 田	1,235人	2,097人	+ 862
東 京	848人	67人	- 781

入る方が多い。東京への通勤者は848人と意外に多く、朝6時半の東武の電車は足利で満席になるという。宇都宮への出82人、入50人よりはるかに多い。しかしこれをもって足利が東京の通勤圏に属するといっは誇大だろう。全市外通勤者に比べれば16%にしかないのである。東京の日常的な通勤圏については東京通勤率50%で1万人くらいが目安になる³⁹⁾。しかしこれは東京に対して出超であることと、東京へ848人行くのが目立つくらい出入りが少ないことを物語っている。つまり足利の労働力は一部太田からの流入はあるが、原則的には足利市域内でほぼ充足しているといわなければならない。太田市と足利の南部とは隣接し、境界が入り組んでいるので出入りが多く表現されている点もある。桐生に流出する者が坂西地区に多いのは当然であろう。

3. 足利市の勢力圏とDIDの都市としての地位

こうしてみると足利の勢力圏は意外に狭い。商圈や機業圏においても市域よりは小さく、通勤圏も出入りを相殺するとほとんど市内労働力を主としている。だいたい足利の勢力圏は足利市域にかぎられるとみた方がよい。

足利のDID人口は6.2万人で全人口に対して41.5%ある。これは佐野の45.4%より低いようにみえるけれども、その勢力圏の範囲でいうと佐野DIDは23.5%になる。これは栃木県全体のDID人口比率26.4%にほぼ近い。したがって勢力圏をとって考えると、佐野より足利の

36) 前掲書、注9)。

37) 昭和43年4月1日飛駒地区の一部は県境をこえて桐生市と合併した。しかし飛駒本村でも足利ばかりでなく桐生の下請をしている。

38) 『昭和40年国勢調査報告』, Vol.3, その2。

39) 岸本実『日本の人口集積』, 古今書院, 1968, 157頁。

方がはるかに高い集中率を持っていることがわかる。

人口6.2万人の足利DIDと、3.1万人の佐野DIDを比べてみると、商店街の大きさ、大型小売店の存在、卸・小売の売上げの大きさの相違（卸3倍・小売2.3倍）、足利には足利銀行の母店⁴⁰⁾、市中銀行、商工中金の支店まである。つまり町としての足利DIDは、その他、学校、図書館などの文化的施設も合わせて、明らかに佐野より一格高い所にあるといわなければならない。

これはクリスターラーの区分⁴¹⁾で佐野をK地点（地区の小中心）とするならば、足利はB地点（地区の主要地点）であるということである。B地点の要件は、職業安定所・専門医院・常設映画館・専門店と専門職人、小規模の百貨店と均一価格店・日刊新聞社・銀行、中央銀行の代理店・ガス工場、高級な郵便局であり、“このB型のものがはじめて全面的な意味で「都市」の名に値する”とされている。足利はこのすべての要件を満たしている。

ところが足利をとりまく直下位の中心地は山辺・山前・葉鹿くらいであろうが、これらはさきにK（地区の小都市）と想定した佐野とは比べものにならず、佐野をとりまくA（連合役場所在地）とした田沼・葛生・岩舟の中心地くらいにしかあたらないであろう。そしてその下にあるMは山辺を例にすれば借宿・八幡・福居・梁田がこれにあたろう。それらは佐野の赤見や小中に匹敵する。つまり足利では直下位のKにあたる所が欠けており、足利DIDだけがとびぬけて一格上のBになっているのである。さりとて佐野・栃木・小山を領域としてその中心というわけにはいかず、商業や地方行政の上からは、これらの町と並列する立場にすぎない。

たしかに行政的な中心としては、佐野と足利は大してかわらない。県や国の出先機関も税務署・警察署などが並存している。ただ簡易裁判

所と区検察庁だけは足利にある。しかし教育関係などでは佐野の方が足利より上位と考えられており、必ずしもすべてについて足利の方が上位ではなく、まして足利の勢力圏が佐野を包括するということは考えられない。

V 足利(C)と佐野(D)との相違

このようにしてみると、足尾山地の南に並ぶ足利と佐野の両市はその町の性格も工業の性質も似ている点がひじょうに多いから、その異同を検討してII—cとIX—dとのちがいを明らかにしたい。

1. 相似点

まずその都市の勢力圏にある人口が足利15万人、佐野13万人で、農家戸数も7,272戸と1万980戸、第2種兼業率も同じくらいである。工業の成立ちをみると両方とも農村賃機を基礎とした織物工業を基礎として、たて編メリヤスから編立業に発展している。組立機械工業が弱く、それに対するあせりから工業団地を造って組立工場を導入しようとしている点も共通である。両市とも低賃金に基礎をおく零細下請工場群を半ば商業資本的なメーカーが統括している。

現在の工業労働力の構成も都市下層労働力半分、周辺村落部分からの労働力半分によって成り立っている。

若干の時間的ズレはあるが、両市の農村における専業、1種兼業農家の脱農化、2兼化ははげしく、最近の工業の発展がこれら村落労働力によってささえられたことはたしかであり、この労働力の供給源として農村の分解がすでに峠をこして余力に乏しくなったこともみとめられる。

都市としては両市とも同じくらいの人口に対する地方中心として物資配給の結節点となっており、商業を本質としており、また官庁・病院・学校などの都市施設もそれほどちがわない。

2. 相違点

しかし明らかにちがうのはDIDの大きさで、

40) 地区支店を統括する所。

41) クリスターラー『都市の立地と発展』, 大明堂, 1965, 200頁。

足利の6万人に対して佐野は3万人にすぎない。商業の大きさは、小売2.3倍、卸売は3倍と足利の方が大きい。銀行も足利には都市銀行が4行も支店をおいており、足利銀行を育成する力をもっていたが、佐野には都市銀行はない。専門店も足利の方がずっと多いように見られる。つまり工業や行政官庁などは似ているが、都市機能の一翼としての流通機構の大きさがまるでちがうのである。これが商店街の規模に反映して、佐野と足利は一格ちがうという印象になっている。

両方とも商業機能を中心とした地方都市であるが、よくみると地方中心としての性格は佐野市の方が明確で、行政官庁も同じようではあるが町の人口に比べると足利の方が少ない。そして足利においては地方中心としては直下位の中心地を欠いており、その商業・管理機能は主として周辺の工業生産に対応したものである。

いま両市とも工業活動を考えないで農村中心としてだけの地方中心の理論的な（仮想的な）大きさを考えてみよう。両市の都市勢力圏の耕地面積を栃木県の一農家当りの耕地面積で割れば、いちおう工業活動にあまりみだされない場合の農家戸数が出る。足利が3,993戸、佐野が6,957戸である。これを県平均の農家率で除すると、足利・佐野の都市勢力圏内の理論的世帯数がとれる。これに1世帯当りの平均人口をかければ都市勢力圏内の理論人口になる。それは足利5万2,682人、佐野9万1,794人である。これに県全体のDID比率（26.4%）をかけると足利2万1,284人、佐野2万4,234人で、これが農村中心としての町の大きさと考えられる。

この大きさは両市とも同じくらいであるが、農家数が多いだけ佐野の方が大きく、地方中心としての大きさが佐野の方が大であるか、あるいはほとんど同じとみえたのは正しいということがわかる。

理論人口と実際人口の差は足利4万7,932人、佐野は7,164人と足利の方が開きはるかに大きく、この部分は両市とも工業の存在と、その波及効果によって生じたものである。足利の場

合にはDID比率は高いが、この4万7,932人の超過人口がDIDにばかり滞留したとは考えられず、また周辺村落の数や広がりもまたしたということはないので、村落部分の密度は高くなり、それだけ平均耕地は少なくなっている。それゆえ地方中心としての足利は原則的に佐野と同程度の地方中心のネットワークを持ち、それに工業のセンターとしての分だけが足利DIDにつけ加わったと考えられる。だから町の格としては佐野より一格上であろうが、地方中心としては佐野と同格の町なのである。つまり佐野が工業を持ちながらもなお、主として地方中心であるのに、足利は地方中心としてよりも工業の中心としてのウェイトがはるかに高いわけである。なんといっても賃織中心の織物工業のセンターというのが足利の町の本質だったのである。いわば同じ卸売でも佐野は消費物資の結節点としてのウェイトが高いのに、足利では生産物のとりまとめの機能が高いといえよう。

工業の面からいえば佐野における近時の工業発展が、直接農家から流出してくる労働力に依存しているのに比べて、足利ではそういう時期はおそらく昭和35年頃までに終わり、現在でも農家から流出する労働力はあるか、全労働力に対するウェイトははるかに軽い。それより足利では都市労働者が商業やその他から工業労働力にかわりつつあることが重要で、このような都市下層労働力と、村落在住の非農業労働力が足利工業の支柱になっている。佐野でも同じ傾向はあるが、都市としての大きさの違いがあるから佐野では農業労働力の流出が目立つのである。

4階層区分におけるⅡ—cとⅨ—dとの違いはこの点にあるので、同じcでもⅨのcではむしろ村落労働力を主としている場合が多いであろう。

結 語

足利の工業は農村の賃機に依存したもので、足利が盛んに都市形成を行なった明治期には主として織物の流通・関連部門の人口が堆積したものであった。しかし力織機化の時代である大

正期には市街地への人口集中の速度はややおとろえ、昭和期に入ってから都市部分の人口の伸びは、全国水準を下まわった。工場は市街地およびその周辺に形成されたにもかかわらず、戦後は足利市街地の人口はむしろ減少気味である。すなわち足利の工業が人口吸引力をもっていたのは明治期のことで、昭和となつてからはすでに形成された都市の労働力の第3次部門が少しずつ工業に転向して、ついに現在では工業人口が半ば以上を占めるようになった。

足利の工業はこうして造出された都市下層労働力と周辺村落部分から出る労働力との二つの柱によっており、昭和以後では地域外からの工業労働力の流入は決して多くはなかった。この点や工業の零細性・給与水準の低さなどは佐野の場合とよく似ている。しかし佐野が現在でも農業労働力から転換しつつある労働力に強く依存しているのに、足利ではそのような時期は早くすぎ去っており、周辺村落は農業村落という

より工業村落になっている。現時点におけるcとdの相違点はこのような周辺村落の工業への傾斜の相違であるかもしれない。

しかし佐野と足利の決定的な相違は、都市としての規模であり、商業・金融の大きさである。これらは農村賃機時代以来形成された都市部分であり、地方（農村）中心としての大きさはむしろ佐野の方が大きい。

しかも足利の商業・金融の勢力も、明らかに衰退の過程に入っている。人口的には市街地労働力の工業への転向、商業資本による繊維関係工場の大企業からの下請化⁴²⁾、足利銀行本店の宇都宮移転などは商業都市足利がたんなる大資本への低賃金労働力の供給の場所に移りつつあることの象徴といつてよからう。

付記 本研究に際し、山鹿誠次教授、日下部高明氏、足利市役所、地域開発研究所のみなさんにたいへんお世話になったことを感謝をもって記したい。

42) 昭和39年以降トリコット業者がメーカーのチョップ品生産にふみきった。つまり商人としての危険負担をさげ下請化したことになる。その後トリコット団地の中ですら弱電の組立がはじめられた。